

目 次

I 研究テーマ設定の理由	71
II 研究仮説	71
III 研究の全体構想図	72
IV 研究内容	73
1 学校生活への適応の面で気になる児童について	73
2 児童理解カードを活用した児童理解について	73
(1) 児童理解カードの7つの特性について	73
(2) 児童理解カードの活用について	73
(3) 児童理解カードによる実態	74
3 好ましい人間関係について	74
4 人間関係を育てる援助について	74
V 実践事例	75
1 実践の内容及び方法	75
(1) 対象児	75
(2) 実態等について	75
(3) 内容及び方法	76
2 指導案	76
3 結果及び考察	78
VI 研究の成果と今後の課題	80
1 研究の成果	80
2 今後の課題	80

＜小学校 教育相談＞

気になる児童の好ましい人間関係を育てる援助

—— 構成的グループ・エンカウターの実践を通して ——

南風原町立津嘉山小学校教諭 玉 城 幸 子

I 研究テーマ設定の理由

近年、学校では児童のさまざまな心の問題が増加の一途をたどっている。平成9年度に実施された学校基本調査（沖縄県教育委員会）によると、小学校における学校嫌いを理由として30日以上欠席した児童は168人となっており、前年度に比較して56人の増加になっている。この学校嫌いの中には、心因性の不登校や怠学、非行などが含まれており、県内の多くの学校においても見られるようになってきた。そして、毎日普通に登校している児童の中にも学級で友達ができない、わがまま、人とかかわらない、暴力的等の心の問題があり、好ましい人間関係が築けない「気になる児童」が見られるようになってきた。

児童が有意義な学校生活を過ごすためには、教師と児童、児童相互の人間関係を深めていくことが重要である。特に児童にとっては、友人関係を深めていくことが大切であり、学級担任は人間関係づくりのために、適切な指導を行うことが求められる。

これまでの実践を振り返ってみると、日記やよい子発見ノート等を活用して、一人ひとりのよさを見つけたり、行動観察を通して心の問題を発見したりして、朝の会や授業、給食時間、休み時間、係り活動などのいろいろな場面で、その都度指導を行ってきた。道徳や学級会の時間には、学級全体の課題や個人的な課題を関連づけながら、人間関係づくりを促すような指導を行ってきた。しかし、行動観察や日記等の情報だけでは、心の問題のある児童の内面の理解が十分ではなく、児童の問題に即した指導が適切に行えなかった。心理検査等を併用して客観的な児童理解に基づいた指導の必要性を痛感した。

児童理解カード（POEM）は、教育相談で児童理解を深めるために開発され、児童の心に問題や行動上のつまずきを早期に発見する心理検査であると言われている。学級全体や一人ひとりの適応状況が理解でき、個に即した教育相談を行うことができるという利点がある。学級で児童理解カードの検査を実施して適応状況を把握し、個を生かす援助の手だてを工夫した集団体験を実施すれば、人間関係づくりを促進するように活用することができると考える。

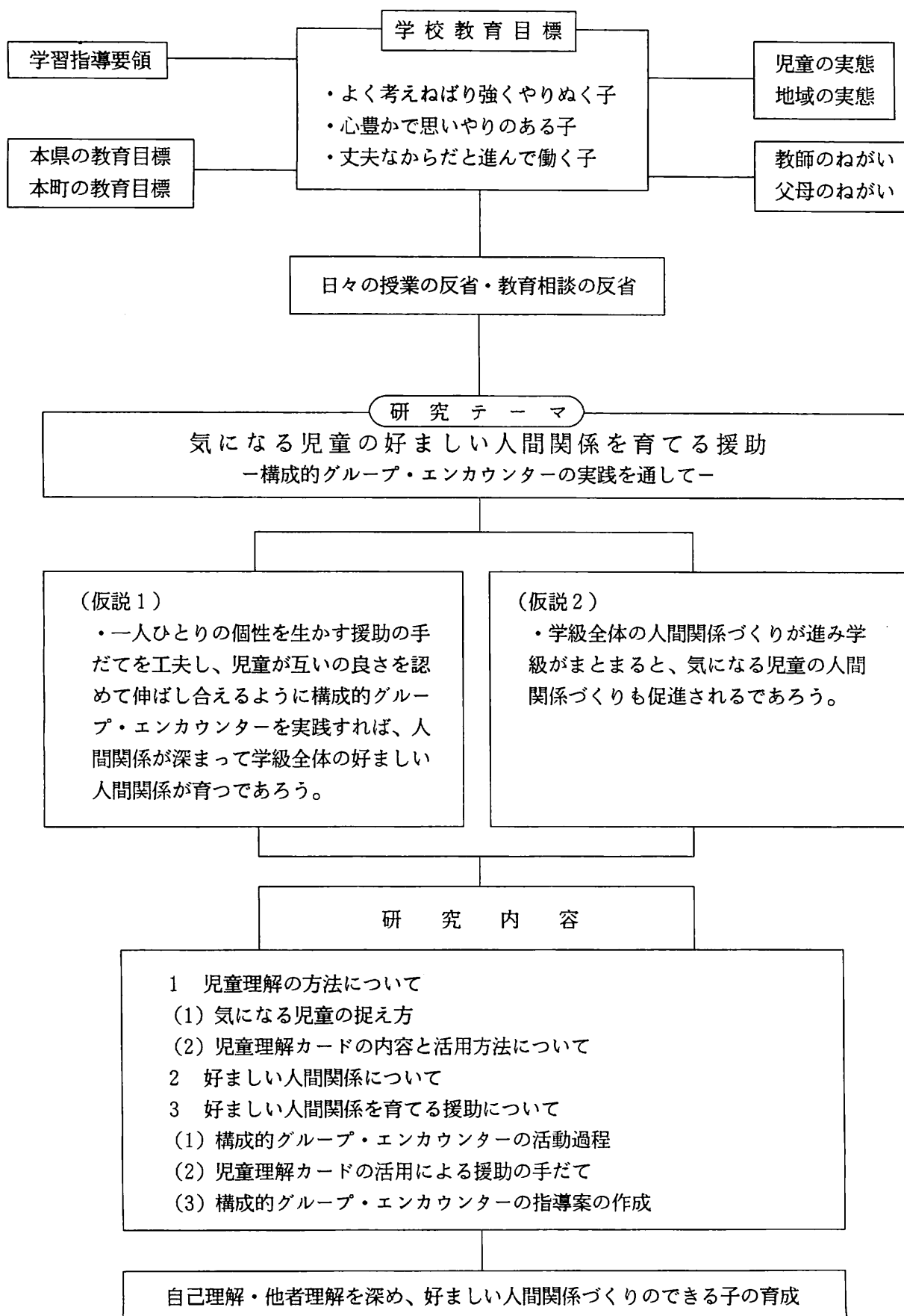
児童相互や教師と児童のふれ合いを深める集団体験として、構成的グループ・エンカウターの実践が多く見られる。構成的グループ・エンカウターでは、エクササイズ（演習）の後に、振り返りの時間が設定されている。振り返りで、実施中に感じたり、気づいたことをみんなで話し合い、ふだんの自分と友達との関わりを見つめ直したり、友達の新しい面を発見したりして友達関係を成長させて、学級全体の友達づくりを促進すると言われている。そして、児童相互の人間関係づくりを促して学級全体の人間関係を深めることは、学級の中の気になる児童の人間関係づくりも促進することが期待される。

そこで、人間関係を一層深めるようなエクササイズ（演習）の種類を検討し、一人ひとりを生かすような援助の手だてを工夫して、児童同士が自然に関わり、お互いの良さを認めて伸ばし合えるような指導を行えば、気になる児童の好ましい人間関係を育てる援助ができるのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

- 1 一人ひとりの個性を生かす援助の手だてを工夫して、児童が互いの良さを認めて伸ばし合えるように構成的グループ・エンカウターを実践すれば、人間関係が深まって学級全体の好ましい人間関係が育つであろう。
- 2 学級全体の人間関係づくりが進み学級がまとまると、気になる児童の人間関係づくりも促進されるであろう。

Ⅲ 研究の全体構想図



IV 研究内容

1 学校生活への適応の面で気になる児童について

国分（カウンセリング辞典）は、いじめ、不登校の問題とは別に、学校生活への適応の面で問題となる行動を示す児童を気になる児童と呼称していくつかの例を挙げ、その問題の状況などについて述べている。その中で、人間関係づくりで課題になる気になる児童として次の事例を上げている。

わがままな子（自分勝手な行動をとり、集団行動がうまくとれない。）、他の子から嫌われる子（いじわるや悪口等、相手の立場を考えない言動が見られる。）、仲間に入れない子（友達になるためのスキルが乏しいため、友達関係になることができない。）、人とかかわらない子（自分を表現することが苦手で、みんなと一緒に楽しめない。）等の事例である。これらの行動は特に目立って問題となることは少ないが、そのまま放置されると学級集団への不適応に発展することが考えられ、行動の改善や予防のための積極的な指導が求められる。

学級の児童の中にも、これまでの学校生活を通して観察したり、触れ合ったりした中から数名の気になる児童がおり、この研究の対象児として取り上げることになる。

2 児童理解カードを活用した児童理解について

(1) 児童理解カードの7つの特性について

学級集団への適応の面で気になる児童については、日常の行動の観察などからも問題となる行動を把握することができるが、行動を起こさせる内面的な要因については理解が困難なことが多い。また、観察や面接などの方法は、実施して解釈するために技術の修得に期間を要するという問題がある。

児童理解カードは、手引きに従って容易に実施でき、心の問題を持っている恐れのある児童をある程度の正確さで見出すことをねらって作成されている。その検査で測定される心理的特性の内容は、受容感、効力感、セルフコントロール、不安傾向、対人積極性、向社会性、攻撃性となっている。

(2) 児童理解カードの活用について

児童理解は行動として外側から観察できる内容と、内面を観察しなければ分からない内容があり、それらを共に理解することが重要である。

児童理解カードは、7つの特性の面から児童の学校生活への適応状況を明らかにすると共に、具体的な指導の課題を示すことができるので、指導の手がかりとして利用することができる。表1に、それぞれの特性の指導の方法についてまとめた。

表1 7つの特性と指導の方法（(3)セルフコントロール、(4)不安傾向、(6)向社会性、(7)攻撃性は省略）

(1) 受容感	・高すぎる場合は、人の意見を聞いたり、気持ちを察したり、級友と喜びや悲しみをわかち合ったりする機会を作ってあげる。 ・低すぎる場合は、教師がその子を愛し、信じていることを具体的な行為として示してあげる。
(2) 効力感	・高すぎる場合は、勉強の遅れている級友の援助させるなどして謙虚さを教える。 ・低すぎる場合は、その子の能力が十二分に発揮できる環境を整備してやったり、成功したときに十分ほめてあげたりする。
(5) 対人積極性	・高すぎる場合は、相手の気持ちを考えさせ、自己主張することを控えさせることを教える。 ・低すぎる場合は、自分の考えに自信が持てるように発言の機会を多く与え、その発言を級友が取り上げるような配慮をする。

(3) 児童理解カードによる実態

図1 適応のタイプ（学級全体）

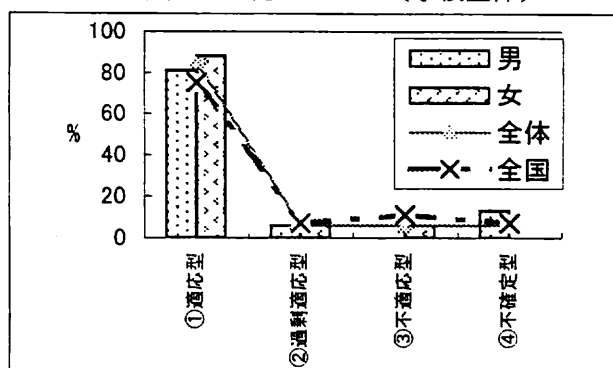
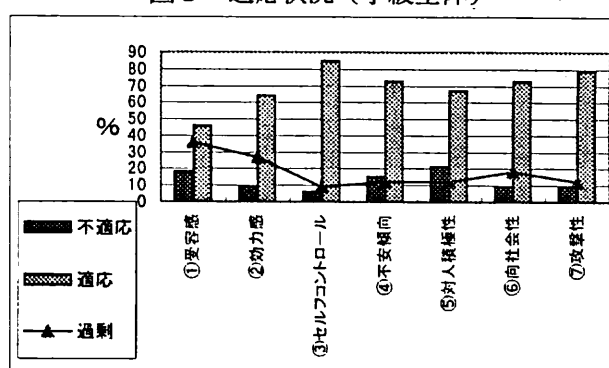


図2 適応状況（学級全体）



① 検査の手続き

ア 実施時期：平成10年11月19日

イ 調査対象：A小学校4年B組 男子16名、女子17名、合計33名

ウ 実施方法：児童理解カード手引きの実施の仕方に基づいて学級活動の時間を使って実施した。

エ 結果の処理：児童理解カードの出版社に郵送で依頼した。

② 検査結果

ア 適応のタイプについて

- ・適応型の出現率は、学級平均が82%となっており、全国平均75%よりもかなり高くなっている。
- ・学級全体としては、大変好ましい学級であるという結果がでた。
- ・過剰適応型、不適応型、不確定型の出現率はいずれも全国平均より少なかった。
- ・過剰適応の男女各1人と不適応の女子1人がおり、それぞれ、本来の自分を出せずに悩んでいるのではないと思われる。そのうち、過剰適応の結果のでた女子については、日常の交友関係などの観察からは予想外の結果であり、今後の継続観察を行う必要があると考える。

イ 適応状況について

- ・受容感を除いて、他の6つの特性の出現率はいずれも全国平均より高くなっている。
- ・受容感、効力感、対人積極性の出現率は、70%以下であり、他の特性に比べて低くなっている。これらの特性を高めるような指導を行う必要がある。

3 好ましい人間関係について

学校における人間関係には、教師と児童の人間関係、児童相互の人間関係などがある。特に、児童相互の人間関係は、学校生活を楽しめるものにする上で重要な内容となっている。

児童期における好ましい人間関係、とりわけ友人関係の指導は、学校教育における全ての教育活動を通して、あらゆる機会に行われなければならない。学級担任は、日常の学級経営において、明るく楽しい雰囲気のもとに互いに助け合い励まし合う関係を育て、児童一人ひとりの個性や能力を発揮させることが求められている。

そこで、好ましい人間関係とは、身近な人間関係の中の2者関係に見られる個と個の好ましい関係を親友とするなら、学級集団において個と個の親友関係の輪が広がり、個人と学級集団との関係において助け合い、励まし合える関係にあるものと考えた。そして、一人ひとりが自分の心を開き、何でも話し合え、分かり合える関係を好ましい人間関係とした。

4 人間関係を育てる援助について

(1) 構成的グループ・エンカウターの活動過程について

構成的グループ・エンカウターの構成は、指導の目的によっていろいろな編成ができる。この研究では、2学期の半ばを過ぎた11月頃の学級集団に、人間関係をより深め、広げて、一層の人間関係づくりを目指している。そこで、短期間に集中して行う短期集中指導の活動過程を計画した。

表2は、国分（エンカウターで学級が変わる－小学校編－）を参考にして作成した、約1月間で行

った構成的グループ・エンカウターの活動過程を示したものである。学級集団の成長過程を想定した活動過程と活動のねらい、児童理解カードの結果からの課題である受容感、効力感、対人積極性を適度に育てる援助の手だてについてまとめたものになっている。

表2 短期集中指導の活動過程及び援助の手だて

活動過程	活動のねらい	援助の手だて
輪の拡大	・学級内の児童相互のリレーションを育成する。	(受容感・効力感) ・児童の発言や行動をできるかぎり共感的に受け入れていくことで、学習に対する効力感と、自分の行動が認められ、生かされたという受容感を育てる。 ・グループで協力して、教え合ったり、相手を知って認め合ったりすることで、受容感が育つようにする。 (対人積極性) ・相手に関心を持って質問したり、質問されたら答えたりすることで、対人積極性が育つようにする。
思いやりの増加	・級友を知り、お互いを肯定的に認め合う。	
自己肯定	・お互いの良いところを見つけ合うことで、自己肯定感を高める	
学級適応	・友達の良いところ、素晴らしい点を見つけ認め合う。	

V 実践事例

1 実践の内容及び方法

(1) 対象児

小学校4年生の1学級、児童数33人(男子16人、女子17人)

気になる児童(抽出児)3人(男子2人、女子1人)

(2) 実態等について

① 学級の実態

男女の仲が良く、係り活動や当番活動など自発的に男女混成グループを編成して、仲良く働くことができる。休み時間には、ほとんどの児童が友達と一緒に教室内外で遊んでいる。

児童理解カードの結果は、学級全体の適応のタイプは適応型の出現率が全国平均より高くなっており、好ましい学級であるということになっている。適応状況も、受容感を除いて、他の6つの特性の出現率はいずれも全国平均より高くなっている。比較的出现率の低い受容感、効力感、対人積極性を高めるようなエクササイズの設定と指導の方法を工夫する必要がある。

② 気になる児童(抽出児)の実態等

児童理解カードの結果と日常の観察の結果を考慮して、過剰適応型の男子B男と不適応型の女子C子、そして、適応型になっているが級友との口論が絶えないA男を気になる児童(抽出児)として選んだ。抽出児の問題及び指導の課題等は次のようになっている。

	A 男	B 男	C 子
問題及び	・自己主張が強く友達に対して強い口調で文句を言う。感情をそのまま表現するので友達関係がうまくいかないことがある。 ・良い点を認め励まし、自分の言動を見つめさせ、わがままな	・友達の輪の中に入って、積極的に交わろうとすることが少ない。気弱な面が見られ人前での発表に緊張をする。 ・良い点を見つけて認め、みんなの前で励まし、少しずつ自分	・自分に自信が持てず、積極的な行動がとれない。気の許せる友達には、笑顔で話したり遊んだりする。 ・温かく信頼できる人間関係の中で、C子の良い点を見つけ

課題	言動をコントロールできるようにする。 ・適応のタイプは適応型である。受容感、効力感、対人積極性が過剰適応となっている	の良さに気づかせ、自信が持てるようにする。 ・適応のタイプは過剰適応型。効力感、不安傾向等が過剰適応で対人積極性が不適応である。	励まし、自分の良さが自信につながるようにする。 ・適応のタイプは不適応型。受容感、効力感、対人積極性向社会性が不適応である。
援助の だて	優しい言葉かけにより、話をよく聞いて十分に受け止めてあげ適度な受容感を育てるようにする。友達に良いことをした時は認め、友達との良い関わり方が分かるよう援助する。	自信のもてないB男の気持ちを受容し、良い点を見つけたり励ましたりして、緊張が和らぐような援助に努める。B男にとって居心地のよい学級の雰囲気づくりをする。	C子の気持ちを受容し、自分の気持ちを言葉で表現することで心を開かせ信頼関係を深める。良い点を認め誉めて自信を持たせ、良いイメージを高めるよう援助していく。

(3) 内容及び方法

構成的グループ・エンカウンターを実施して、埼玉県立北教育センター(1998)を参考に作成した友達関係調査及びソシオメトリック・テストを実施した。

構成的グループ・エンカウンターは、次のような指導計画を立案し、各回毎に振り返り用紙に記録させながら実践した。友達関係調査及びソシオメトリック・テストは指導前と指導後に実施し、学級集団及び気になる児童(抽出児)の変容を考察した。表3は、国分(エンカウンターで学級が変わる一小学校編)を参考に作成した指導計画である。

表3 構成的グループ・エンカウンターの指導計画

活動過程	回	題 材 名	備 考
輪 の 拡 大	1	「質問ジャンケン」(他者理解)	学級活動(11/26)
	2	「ご指名です」(信頼体験)	学級の時間(11/30)
	3	「リズムリレー」(自己主張)	学級活動(12/5)
思いやりの増加	4	「ほめあげ大会」(自己理解)	学級の時間(12/7)
自 己 肯 定	5	「あなたの〇〇がすき」(自己理解)	学級活動(12/10)
学 級 適 応	6	「がんばり賞あげよう」と(他者理解)	学級活動(12/19)

2 指導案

構成的グループ・エンカウンターの実践は、指導計画に従って学級活動、学級の時間を使って6回実施した。次に、第5回目に実践した「あなたの〇〇がすき」(学級活動)の指導案を示す。

学 習 指 導 案

A小学校4年B組

(1) 題 材 「あなたの〇〇がすき」(自己理解)

(2) ねらい

・友達のよいところを探し、その人に伝え、自分も友達から言ってもらうことで、自尊心を高めることができる。

(3) 題材設定の理由

児童のさまざまな心の問題が増加の一途をたどっているその背景には、人間関係の希薄さが考えられる。そのような問題を解決するためには、児童相互の自己理解や他者理解を促し、信頼感や自尊感

情を高める必要がある。一人ひとりが生き生きと活動でき、楽しく学校生活を過ごすためには、児童と教師、児童と児童の人間関係を深めていくことが大切であるとする。そこでふれあいを深める集団体験学習として自尊心を高め、温かい人間関係をつくるエクササイズ「あなたの〇〇が好き」をすることによって、ある程度解決できるものとする。

(4) 準備資料

ワークシート・ 筆記用具

(5) 指導の流れ

過 程	指導内容と児童の活動	教師の援助	備 考
ウォーミングアップ 5分	<目を見て握手> ・教室を適当に歩きながら、出会った人と黙って目を見て握手をする。 <目を見て握手でこんにちは> ・教室を適当に歩きながら、出会った人と目を見て笑顔で「こんにちは、今日も1日頑張りますよう。」と握手をする <あなたの〇〇が好きです>	・教師も中に入り、共に行うことでリレーションづくりをする ・B男とC子が積極的に参加できるように声かけをする。 ・男女の隔てなく握手できるように言葉かけをする。 ・C子が男の子の中に入って握手できるように、教師が手をつなぎ誘導する。	・分け隔てなく握手をすることができる。
つかむ 5分	お互いのよいところを伝え合う ◎ルールの確認をする。 ①2列になり、2人で向かい合い、相手のよいところを交代して言う。 ②次のペアに移る。一方は動かないでもう一方の先頭は一番後ろに移動し、2番目だった人が一番前に移動する。 ③一巡するまで繰り返す。 ④1ペア1分くらいを目安に、良いところを言ってあげる。 <あなたの〇〇が好き>	・ルールを確認させ、友達のよいところを言えるよう助言する	・ルールを確認することができたか。
深める 30分	①2人で向かい合い、友達のよいところを伝えあう。 ②ペアをどんどん変えて、友達のよいところを伝え、自分のよいところも友達から言ってもらう。	・自分のよいところを知る。 ・B男には、相手に聞こえるように言ってあげられるよう声かけをする。 ・A男には、言葉づかいに気をつけて伝えるよう助言する ・友達のいいところや自分のいいところを言ってもらい今の気持ちについて書けるように援助する。	
振り返る 5分	・振り返り用紙に、今の気持ちを書く。		(振り返り用紙) ・今の気持ちをしっかり見つめ自分の言葉で表現する。

(「エンカウンターで学級が変わる(小学校編)」国分康孝を参考に作成)

3 結果及び考察

(1) 各エクササイズに対する児童の感想と考察

全体としては、今までこのような経験をしたことがなく、戸惑いや違和感を持った児童もいたがしだいに慣れ、「楽しい、もっとやりたい。」という感想が増えた。

今回の実践では、6種類のエクササイズを指導したがそれぞれに対する児童の評価は次の通りになっている。

「質問ジャンケン」、「ほめあげ大会」、「がんばり賞あげよつと」等は、男女とも全ての児童が楽しかった、とても楽しかったと答えている。

他のエクササイズも9割以上の男女が楽しかった、とても楽しかったと回答している。今回選んだエクササイズは、いずれも適切な課題の選定であったと言えると思う。

(2) エクササイズに対する児童の振り返りと考察

実践5「あなたの〇〇が好き」のエクササイズを実践した後に、活動を通して気づき、考え、感じたこと、新しい友人関係の発見等について、次のように振り返り用紙に書いている。

- ・自分にこんなにいいところがあるとは思いませんでした。だから今は、言われたことをもっとがんばりたいです。(男)
- ・自分で気づけなかったことや、ぼくにあてはまっていることを、あいてが教えてくれたのでうれしかったです。また、やってみたいです。(男)
- ・今までに言われなかったことがいっぱいありました。しゃべれなかった人やけんかを何回かしたところのある人でも、私の好きなところを言ってくれたのでうれしかったです。私も、みんなになかなか言えない好きなところを言えてすっきりしました。(女)

<考察>

・これまで相手の長所を伝え合う体験がないので、自分の良さを相手から言われて初めて知った喜びを感じ取った子が多かった。級友から自分の良いところを教えてもらうことで、あたたかな人間関係ができたと思う。

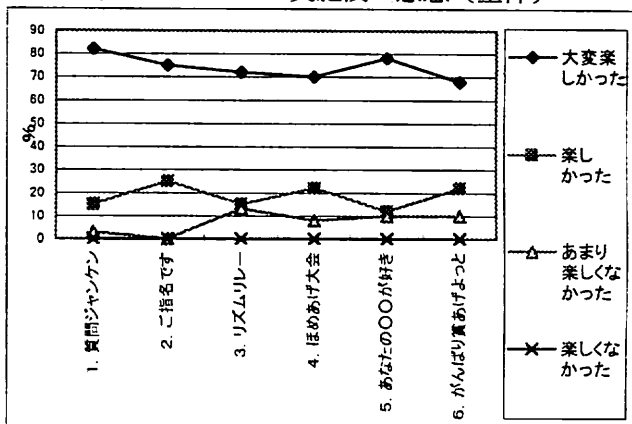
<抽出児のエクササイズに対する振り返りと考察>

A男は、学習の振り返りで「今日は、みんなのよいところをいっぱい言えました。ぼくのよいところは、算数がとくいで、え顔がよいと言われました。」と、活動を振り返っている。お互いの長所やよい所を伝え合うことで、級友の良さや、自分の良さが分かり、認め合うことができるようになってきた。言葉づかいにも気をつけながら、友達とよい関わり方をしようとする態度が見られるようになった。

B男は、「となりの人のいいところを言ったりすると、クラスの人いいところがよくわかって、自分のいいところもよくわかりました。」と、自分の活動を振り返っている。周りの友達から自分の良さを教えてもらうことによって、自己理解を深めることができたようである。対人関係が徐々にうまくできるようになってきた。

C子は、「私は自分のいいところをいろいろ言ってもらったので、とてもうれしかったです。これからも、自分のいいところをだしていきたいと思います。」と、体験を振り返っている。今まで、気づけなかった自分の良さを友達から言ってもらうことで、自信を持ち、積極的に級友との関わりを持とうとする様子が見られるようになった。

図3 エクササイズ実施後の感想(全体)



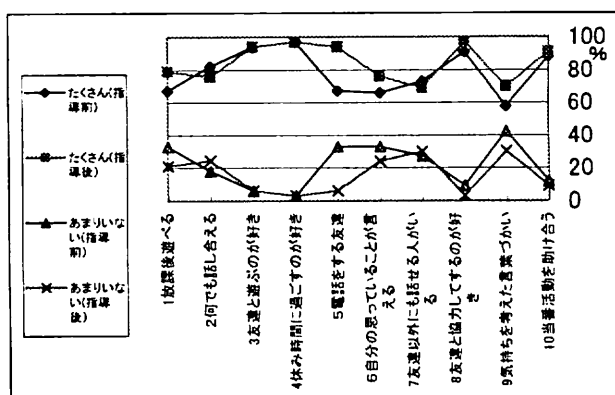
(3) 友達関係の調査とソシオメトリック・テストの結果及び考察

① 友達関係の調査結果と考察

図4 友達関係の調査（全体）

ア 学級全体

図4は選択肢の「たくさんいる」と「いる」の合計、「あまりいない」と「いない」の合計で比較した結果である。「放課後に遊べる友達」、「相手の気持ちを考えたことばづかい」の項目では、エンカウンター指導後の「たくさんいる」の数値が12%高くなっている。「電話をする友達」の項目では、指導後は「たくさんいる」が27%も高くなっている。



「何でも話し合える友達」では7%、「友達以外にも話せる人がいる」では4%減少した。

友達関係の調査では10項目のうち6項目で指導後の得点が高くなっていて、エンカウターの実施で、友達関係が促進されたことが考えられる。

イ 抽出児

A男は放課後に遊べる友達がいなかったのが、少しずつ遊び友達ができてきた。友達以外に話せる人も、あまりいない状態から少しずつ増えている。友達との良いかかわり方が少しずつ分かってきたのではないかと考える。B男はきまじめな性格で、指導後の自己評価の基準を厳しく行っていて4項目に低い評価をしている。しかし、電話をする友達が増えたり、友達と協力をしてやるのが好きになったりしている。級友とのかかわり方について今後も継続的に援助していく必要がある。C子は友達と遊ぶのが嫌いだと答えていたのが、あまり好きではないに変わって友達と遊ぶことが少しできるようになってきた様子がうかがえる。

② ソシオメトリック・テストの結果と考察

ア 学級全体

エンカウンター指導後は、学級全体のIsss（平均社会測定的地位指数）が高くなり、被選択数も増えていて、一人ひとりの友人関係の広がり、学級集団としての親和性の深まりが見られた。指導前は6つの下位集団に分かれていたが、指導後は3つの下位集団に分かれ、第1下位集団に学級の大多数が含まれるようになり、一層まとまりのある学級になったことがうかがえる。周辺児の数は指導の前後において変化がなかった。周辺児の一人であるB男は、個別的な援助の工夫を行って学習に参加させたので、Isss も-0.03 から0.02へ変化している。A男のIsssは0.04から0.16、C子のIsssは0.10から0.22へと高くなっている。人間関係の変容がうかがえる。

イ 抽出児

図5 A男の社会的原子図（指導前）

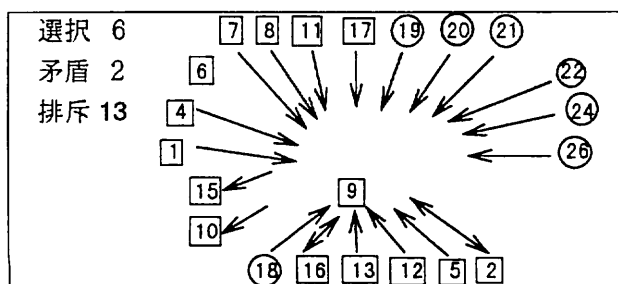
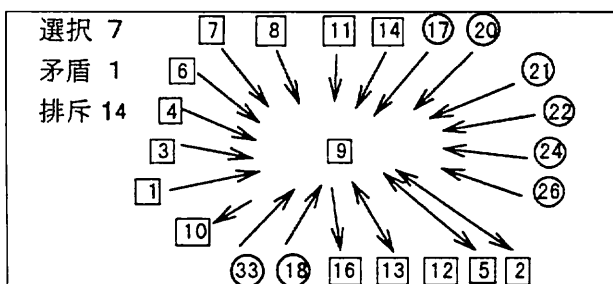


図6 A男の社会的原子図（指導後）



A男の選択は6から7、相互選択は2から3となっている。指導前の排斥は13で被排斥の理由は「いらいらする言葉をつかって文句を言う」等となっている。あまり好意を持たれていないので友達に対する言葉づかいやかかわり方について援助をした。少しずつ、心のコントロールができるようになり、周囲からも受け入れられて人間関係の広がりが出てきた。

図7 B男の社会的原子図（指導前）

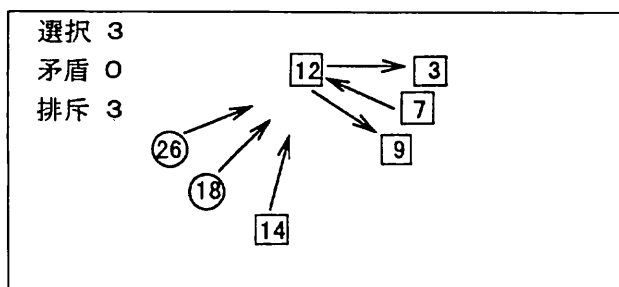
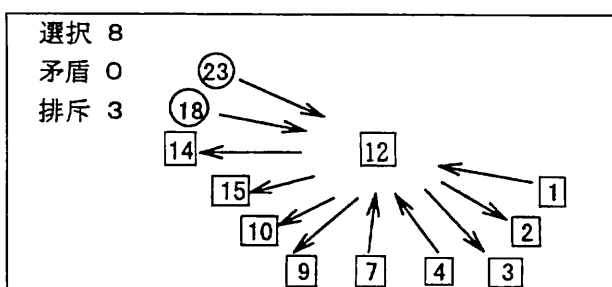


図8 B男の社会的原子図（指導後）



B男の選択は3から8に増え、相互選択0、排斥3は、変化がなかった。被排斥の理由は「無口で暗い」となっている。多くの児童とのかかわりを持たせ、集団の輪の中にうまく入っていきえるような援助をした。少しずつ対人関係の広がりが見られるようになってきた。

図9 C子の社会的原子図（指導前）

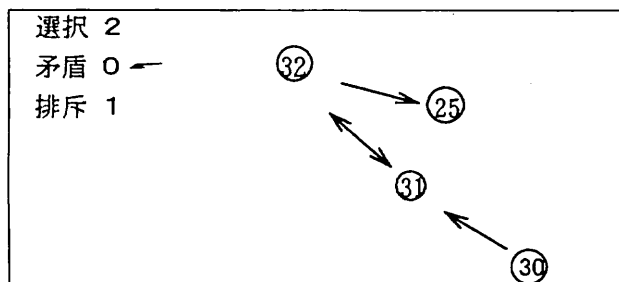
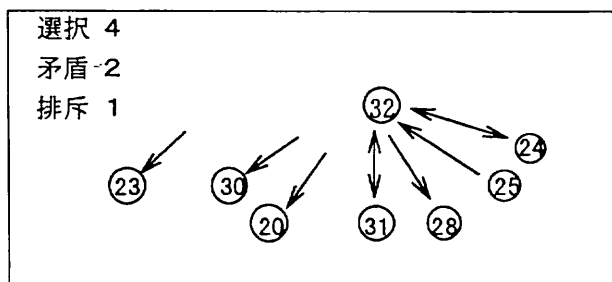


図10 C子の社会的原子図（指導後）



C子の選択は2から4、相互選択は0から1に増え、排斥1は変化がなかった。被排斥の理由は「いじわるをされた」となっている。あまり目立たない存在なので、相互選択をした女の子を通して友達を広げさせてきた。自分のよさに気づき自信が持てるようになり、人間関係の広がりが見られるようになってきた。

VI 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- ・児童理解カードの結果を分析して、特性の弱い面を補うような援助の手だてをしながら構成的グループエンカウンターの指導を実施することができた。その結果、友達関係調べで放課後に遊べる友達や電話をする友達が増えたりするなどの変容が見られた。
- ・学級集団の人間関係の深まりにともなって、その中の気になる児童の人間関係も育つことが見られた。
- ・ソシオメトリック・テストを構成的グループ・エンカウンターの指導の前後に実施して比較することは、児童の好ましい人間関係の変容を捉えるのに効果があると考えられる。

2 今後の課題

- ・児童理解カードを指導前後で実施をして、それぞれの特性がどのように変容するか確認するための継続研究が必要である。
- ・構成的グループ・エンカウンターの年間を見通した計画、実施方法や教育課程の位置づけについて理論研究を深める必要がある。

<主な参考文献>

- | | | | |
|----------|---------------------------|------|-------|
| 1 国分康孝監修 | 『スクールカウンセリング事典』 | 東京書籍 | 1997年 |
| 2 国分康孝編 | 『構成的グループ・エンカウンター』 | 誠信書房 | 1992年 |
| 3 国分康孝編 | 『エンカウンターで学級が変わる（小学校編）』 | 図書文化 | 1996年 |
| 4 小石寛文編 | 『児童期の人間関係 人間関係の心理学 3』 | 培風館 | 1995年 |
| 5 高野清純他著 | 『教研式POEM-児童理解カード-手引（小学用）』 | 図書文化 | 1998年 |